

中西美沙子 [教育コーディネーター]



大丈夫よ! お母さん!

～母の声、子どもの声～

「母の声」が聞こえなくなって久しい。
イギリスの女性探検家イザベラ・バードの著書に、「日本奥地探訪」があります。明治の初めに、東北や北海道を旅したことが克明に記された優れた紀行文です。本の中には、「日本の子どもの姿」が丁寧に描かれています。

その頃の東北は、未開の地と言って良いほど文明から遠ざかっていました。だが日本の親が子どもを思う気持ちは、イギリスなどの先進国よりも強いと感嘆しながら、「文明とは何か」を彼女は問っています。

バードは、ある村の出来事を記しています。「夕方になると、どの家からも本を読む子どもの声が聞こえてくる。こんな田舎であるのに、『学ぶ』ことが静かに行われている。それだけでなく、薄暮の頃になると、いっせいに子どもたちが外に出てきて遊ぶのである。子どもの歓声が、村の隅々にまで広がる」。バードは、その時を慈しむように見ているのです。

このような時は、私が子どもの頃にもありました。「学び」と「遊び」の時が、音楽のように聞こえる時を、私たちはもう失ってしまったのでしょうか。

夕飯の匂いが路地にみちる頃、母の声が聞こえました。「ご飯よ」。その声に押されるように、私たちは熱中していた遊びを、終える。興奮の余韻が冷めないまま家に入ると、そこには暖かな家族がいました。「母の声」は、安心の声

でもあったのです。

現代は、「欲しいもの」と「競争」に彩られた時代です。貧しい頃とは違い、物が必要以上に溢れています。何を自



中西美沙子プロフィール

教育コーディネーター。執筆・講演活動の傍ら、文章教室「スコーレ」・画廊「キューブ・ブルー」(浜松市中区元城町)を主宰。文章教室「スコーレ」では、小学生から大人まで幅広い層を対象に、ただ書き方を教えるのではなく、「この時代をどのように生きるか」を見つめさせるような試みをしています。お問い合わせは、TEL.053-456-3770

ホームページは



著書の「ピアノシモでね」(東京書籍)は、中日新聞に連載した人気コラム「つかまえて!こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。(税込1,500円)

＝お求めは浜松市内の谷島屋で＝

分の生活の基準に置くかがとても見つけにくい世界に、私たちは生きています。子どもへの視線も不安定になっています。「受験」や「勉強」の環境を整えるのが、親の愛情にとって代わっています。そ

のようなことも良いでしょう。その時、何が子どもにとって大切なことかを知っているなら、大丈夫。「親」と「子ども」の間にある安心感がなくては、将来に禍根を残すことになるかも知れません。

「キッチン」。吉本バナナの代表作には、主人公がキッチンで眠るシーンがあります。この小説は、現代の空んな家族の絆を描いています。手からこぼれ落ちる家族への思いを、「キッチン」で眠ることで、主人公は繋ぎとめます。このキッチンは暗示的でもあります。現代の家族が失ったものがキッチンだと感じさせるのです。

「台所」は家族の絆を育む地位を失い、「食を摂る」だけの機能の場になりつつあります。

「父の寡黙な姿」「母の穏やかな目配り」を子どもたちが感じる所が、かつては「台所」でした。そこで親の愛情や権威を、無意識の中で学んでいたのです。

私の主宰している文章教室に、落語や歌舞伎を親と一緒に見ている小学生がいます。その経験を一生懸命、私に話してくれます。落語や歌舞伎を子どもが理解するのは難しいことです。しかし、彼女の好奇心に満ちた目を見ると、過ぎ去った時や言葉が育んできたものの強さと大切さを感じるのです。そして、親とともに「見たり」「感じたり」することの大きさを、思うのです。私の考える「母の声」は、そんなところにもあるのです。